James H. Cole

Shaohsing: Competition and Cooperation in Nineteenth-Century China

安野省三

わたくしは著者ジェームズ・H・コール氏とは一面識もない。巻頭の著者紹介によると、一九七五年にスタンフォード大學から博士號を授與され、本書の刊行年次である八六年の時點では、スタンフォード、ワシントン、エールの三大學で中國史を講じておられる。かたわら、コーネル大學圖書館東アジア關係ウォーソン・コレクションの主事であり、八五年にはコーネル大學の中國・日本プログラムの客員研究員にもなっている。右の經歷は經歷として、問題は作品の出來映えである。端的に言えば、歴史文化名城である紹興府を實驗臺にのせ、巧妙なメス捌きで見事に解剖をやってのけたというのが讀後感である。スキナー教授を長とする《寧紹プロジェクト》の實力を垣間見る想いもするが、所詮は著者の才氣煥發・用意周到に支えられた熟成度の高い作品というほかない。まずは目次から。

序文
第一部　競爭による生き殘り
—紹興の地域社會—
第一章　地方名士
1　構成員はだれか？
2　內部の結束と葛藤
3　〝鄉紳〟か〝商人〟か
第二章　堅實な庶民
—生存競爭—
1　佃租と稅糧
2　インフレと搶米
第三章　無賴とその周邊
1　鹽と砂
2　匪賊
3　賤民
第二部　協力による生き殘り
—清朝下の紹興閥—
第四章　紹興の移住傳統
第五章　屬官
1　順天府の屬官
2　中國全土の屬官
第六章　中央官廳の胥吏と幕友
1　中央官廳の胥吏
2　幕友
終章　一民族としての生き殘りをめざして
—清末、紹興の地方改革—
1　司法改革
2　教育の近代化
3　地方自治政府
結論

附篇
A　宗族
B　一八九二年、常州・蘇州・杭州・紹興の屬官輩出比較
C　紹興酒、紙錢及び初期近代工業

全體の構成をみると、充分に推敲を重ね、計算し盡した才氣が傳わってくる。第一部は內なる鄕里にあって、家族・宗族の結合をよすがに他家族・他宗族との〝競爭による生き殘り〟を視野に收め、第二部は外なる異鄕にあって、同鄕人の協力をよすがに他鄕人と競爭しながらの〝協力による生き殘り〟をモチーフとしている。紹興人の活動を內（競爭）と外（協力）とに分け、兩者の釣合いを測りながら、紹興の全貌に迫ろうという寸法である。さらに章節に立ち入ると、第一部の三つの章で鄕紳・商人・佃戶・匪賊・賤民といった順序で社會層を上から下まで網羅し、第二部の三つの章もいわゆる紹興閥の支柱となる屬官・六部胥吏・幕友を扱って遺漏なきを期している。終章は淸末の紹興における司法・敎育・地方政治の改革や近代化を取り上げているが、この章だけはやや息切れを感じさせる。が、敢えてそこまで踏み込んだ氣慨というか周到さというか、その邊のことは評價すべきであろう。なお、各章の冒頭、いわばエピグラフに相當する箇所には、紹興出身の魯迅の文を配するといった心憎い演出も施され、學術書とはいえ、あくまでも讀者の興趣をそらさないサービス精神が嬉しい。

問題意識　これは序文の中で明示されているし、見方によれば十一頁を占める序文は、本書の骨格と結論を先取りしている觀が深い。著者は主要テーマの一つに、「なぜ紹興という一地方が王朝の行政機構に對し分不相應ともいうべき影響力を行使し、中央から大きな利益をあげることができたのかを解明する(三頁)」ことをあげている。紹興がたんに科擧合格者を量產したにとどまらず、科擧制度を廻避し、より確實な徑路で官僚機構にもぐり込むこと（屬官・六部胥吏・幕友の輩出）にも成功した點を力說する。科擧の幹線をゆくために各宗族は族內で最も優秀な子息の敎育投資に熱中し、バイ・パスのためには〝紹興閥〟が最大限に利用される。紹興はこの官途をめざす兩面作戰に奏功し、富や權力を獲得した。大勢の官員を送り出した紹興にとっては、傳統的な官員廻避法は任地である異鄕を心置きなく收奪できる便宜となり、外地での利得が還流して鄕里を潤した。

ひるがえって、紹興という地域社會の內部にあっては、宗族の演じた役割を重視する。凡ゆる事例で、宗族意識（地主から佃戶までを含む意味で垂直的）が階級意識（同一レベルの階級から成るという點で水平的）を凌駕したとは斷言できないにしても、宗族は忍耐の限度內で構成員の不滿を抑え込み、しばしば階級鬪爭を挫折させる機能を果したとする。ここでは〝械鬪〟の評價が問題となる。

淸末、紹興人の內外での活躍を總括して、局面が地方レベルの競爭の場合は同族レベルで協力し、淸朝の政治レベルでの競爭の場合は民族レベルで協力したとする。ただし、第三の局面では、淸末民初の改革路線において、協力の實績を確かめるというよりは、むしろ民族レベルで協力する必要性を認識していた精神構造に比重をおいている。著者は言う、「要するに一定のレベルで恐るべき競爭にさらされている人々は、一つ低いレベルの人々と協力することで事態に對

處したわけである。外部での競爭で生き殘るために、どのレベルの社會集團も構成分子內での協力を必要とした。內部協力を促したのは閒違いなく外部競爭であった（一一頁）」と。小から大へと順次視點をずらせながら、重層的構造をもつ社會集團を競爭と協力の綱引きで理解しようという方法である。Competition と Cooperation—この背反する兩原理が相互作用を繰り返しながら、つねに統一と調和へ向って收束するという思想が確立しており、それが本書のもつ名狀し難い一種の安定感の支えとなっている。

鄉紳の概念規定　紹興の地域社會を扱った第一部は、社會集團を〔宗族というタテの結合〕と〔階級というヨコの結合〕の相關關係で理解しようとする。このタテ・ヨコの座標軸の領域で各種の政治・社會・經濟現象がドットとして位置づけられ、全體としての紹興像を形づくる。ドットの二、三の例を擧げれば、鄉紳と非鄉紳に對する稅率の不公平さとそれを主因とする中心部（山陰・會稽縣）での階級鬪爭（抗租と搶米）の激化。階級鬪爭こそ宗族の結束を弱めるものだとの認識に基づき、佃戶を他の宗族から雇う愼重さ等々。ここで、宗族・階級の頂點に立つ鄉紳が注目される。

いったい鄉紳とは誰のことを指すのか？—言い換えれば、鄉紳の概念規定が俎上にのぼせられる。周知の通り、永年にわたって日本の明淸史硏究者が折にふれ持ち出してきた問題である。從前は資格や肩書のうえでどの線から上が鄉紳であるのか、という議論であった。直截にいえば、生員は鄉紳か否か？の疑問文に集約されていた。ところが、著者は全く違った視點から柔軟な思考を驅使する。二十世紀初の周作人・周建人の證言を引用し、まず鄉紳の中に無產者がいたことに驚きを示し、ついで鄉紳を科擧資格の用語でだけ定義づけるのは現實から遊離し意味を狹めてしまうとみる。狹義の定義づけに拘わると、生員は鄉紳か否か？の質問から脫却できない。實は、鄉紳は客觀的定義を下せるような固定的用語ではなく、鄉紳の範圍は社會の當該關係者の主觀でもって變化するという。たとえば、社會の下層の人々からみれば、進士も生員も同じ雲の上の人、といった按配である。紹興でも、敎育程度が高く裕福な中心部と敎育程度が低く貧乏な周邊部とでは、鄉紳の範疇・役割等々おのずから違ってくるわけである。この件りは、たんに抽象的議論を展開するのではなく、具體的事例の裏附けもあって、說得力に富む。對照的に、批判の對象となっているわが明淸史硏究者の生硬さは覆いがたく、反省すべき點が少くない。

抗租と械鬪　紹興においても庶民の壓倒的多數は佃戶である。これは宗族の蓄財・收入の主流が土地・佃租であることと表裏一體をなす。著者は族譜を點檢し、㈠族譜が宗族內の佃戶の姓名を列記していること、㈡宗族の姓と佃戶の姓は一致しないこと、を明らかにする。そして、「宗族の成員をして宗族の土地を耕す佃戶とするなかれ。彼への債務返濟の督促が宗族の調和を損う、そういう頑固な不心得者を出さないように、蘇州范氏の內規を守る御手本となれ（三三～三四頁）」という一八八四年の山陰縣の一族訓が嚴守されていた證據とする。ついで、抗租（階級閒鬪爭）と械鬪（宗族閒鬪爭）の關係に言及し、主佃閒鬪爭が宗族閒鬪爭に轉化する可能性が大であったと斷定する。

一方、紹興ではしばしば社廟が鬪爭の組織單位となったが、一村が一宗族で構成されている事例の存在を念頭におくと、本來は地緣のシンボルであった社廟が血緣のシンボルでもあったという二重の

性格を帯びていたとする。抗租は械鬬の前で萎縮し、階級鬬爭として自己貫徹することは稀れであった。血は階級意識よりも濃かった。社廟すら血縁のシンボルと化す趣があった。著者は階級鬬爭は低く評價し、諸々の社會現象の中で果した宗族の役割を強調する。たしかに、紹興のように太古より開發され、舊秩序を墨守する傾向の根強い先進農耕社會にあっては、階級鬬爭が地域社會の枠を越えて擴大する蓋然性は少ない。内部で抗租や抗糧をそこそこに繼續實行しさえすれば、生きてゆけたからである。從って、著者の結論は大筋では首肯できる。ただ、紹興もまた一九四九年の〝解放〟の一翼を擔ったことは紛れもない事實である。たとえ、解放鬬爭の本流ではなかったとしても……。〝解放〟への脈絡がどうなっていたのか、いささか氣になるところである。

社廟については、溯って全祖望の「無知な大衆によって推進された偶像崇拜や邪教を育む土壌とみなす（三七頁）」見解を引き、社廟のもつ二面性を指摘することも忘れない。つまり、社廟のもつ異端性こそ民衆活力の源泉と認め、「社廟は地方の一般民衆の生活に奉仕したということで重要な役割を演じたし、端的にいって、地方の社會組織の有意義な裝置であった（三七頁）」と斷ずる。こうした論調は近年のわが明清史研究の問題關心に馴染む。ただし、異端性を内に祕めた社會組織が自己增殖作用を起こし、大規模な反體制運動（典型的には農民戰爭）へ向って結集してゆくことは、江南の水田稻作地帶では考えられない。だからこそ、著者が社廟と宗族との癒着一體化に主眼を置く道理が生じる。これが、たとえば四川北部の雜穀地帶の寺廟の場合だと、事情は一變する。差當って、胡昭曦氏が張獻忠との因縁で取り上げた梓潼縣七曲山大廟の後世に與えた影響を想起すれば充分であろう（『張獻忠屠蜀攷辨』四〇～四三頁參照。四川人民出版社、一九八〇年）。要するに、同じ廟であっても、當然のことながら地域によって演じた役割は様々であったということになる。

いわゆる廻避制の擴がり　明代に官員が本籍地へは着任できないという、廻避原則が確立したことは周知の事實である。親戚知己の請託を防ぐのが狙いであった。却ってこの原則は、異郷に身を置けば、役得に對する良心の呵責を伴わないという逆效果を生んだ。著者は多くの職種・分野に或種の廻避原則が擴がっていたことを檢證した。第一は商工業者。米所の紹興は一方で人口が稠密なために平年作でも米を輸入。まして凶作なら搶米は茶飯事。紹興の米穀商たちは紹興生れではなかったから、飢餓に瀕する民衆に穀物を提供しなくとも、心に負い目を感じなかった。これは、官員の廻避原則がもたらした逆效果と好一對をなす。茶商は徽州人で、身内同士だと徽州方言を用い、客相手には紹興方言を操ったという。さらに一九二〇年代の諸暨縣の市街地を取り上げ、そこでは職種別に出身地が分かれていたと述べる。藥商は鄞縣、皮革商は東陽縣、砂糖商は義烏縣、舶來品や廣東商品は蕭山縣、質屋は徽州府といった具合である。第二は匪賊。彼等の間には一種の廻避原則があり、紹興周邊部で暗躍したのは臺州府出身者であったのに對し、紹興府の嵊縣・新昌縣出身の匪賊は、たとえば一九二〇年代に上海で暴れ廻って惡評をかったという。

匪賊を話題にしたついでに、廻避原則とは直接關係はないが、著者の匪賊觀を窺ってみよう。こう自問自答する。近年、學者は匪賊を、大衆の意志の英雄的化身か、根っからの犯罪者たるギャング

か、そのどちらかとして扱うが、紹興の實例に照せば、前説より後説に荷擔したい、と。大局的には適確な判定である。ただし、匪賊とか祕密結社とかが内に藏する複雜な性格のうち、それが歴史社會の推進力につながった面も無視できないわけで、そうなると二者擇一式に〝社會のダニ〟として片付けるのはいかがか？差當り、十八、九世紀の四川嘓噲（地方的匪賊）についての胡昭曦・霍大同・楊光三氏の分析・評價（〝嘓噲考析〟、『四川省史學會史學論文集』所收、四川人民出版社、一九八二年）をどう受け止めたらよいのかという連想が頭に浮かぶ。胡昭曦氏らが嘓噲の活動の中に革命性を見出そうとしたのとは對照的に、コール氏は次のように結論づける。「かりに、（紹興の）中心部での階級鬪爭（たとえば、抗租鬪爭）が大衆の勝利に終ったとしても、周邊部での盜賊行爲で全體的にはそれは帳消しにされた。つまり、盜賊も一種廻避制であったので、犧牲にするのは餘所者であり、決して階級の同一性ということでは協力はしなかった。周邊部では庶民も犧牲となり、階級鬪爭のための力量を削がれたのである（六五頁、抄譯）。」もちろん、四川の山間部と紹興との地域差、紹興内部の中心部と周邊部との相違等を考慮に入れなければならないわけだが、たんにそれにとどまらず、兩學者間には中國史を眺望するさいの視座の違いといった決定的な〝分かれ〟が存在するように思えてならない。敢えて言えば、ここでもまた〝分かれ〟のポイントは、中國史上での一九四九年の〝解放〟の位置づけにほかならない。

移住の傳統　第二部は鄉里を離れて異鄉で暮らす紹興人を問題にする。まず、中國の到る處で彼等にお目にかかれたという事實を、諺（〝豆腐と雀と紹興人〟）と一八七五年のイギリス人宣教師の言（「もし紹興さえ改宗してくれたら、紹興人の全中國への擴散からして、キリスト教の傳播を促進するはずだが……（七五頁）」）で確かめる。紹興人の移住の追跡調査の一方法として、北京をはじめ全國各地に建設された會館を調べる。要するに、清朝下の紹興閥を檢證しようとした。その結果、主だった移住地での特色が浮き彫りにされる。〔上海〕紹興閥最大の據點で、十九世紀後半～二十世紀初、寧波人と並んで〝寧紹幫〟を形成して錢莊を支配。ほかに、商業の各部門、勞働階級、茶館の歌い手から匪賊まで、多方面に進出。〔杭州〕一九二〇年代、杭州は〝紹興人の植民地〟とよばれたが、とりわけ諸暨縣人が目立つ。門番・調理師・髮結い・針子・乳母・洋服屋・床屋等々、杭州人は搖籃から墓場まで、紹興人と接しない日は一日もなかった。〔蘇州〕染物屋・ロウソク製造職人、すべて紹興人。清末、醬油・米取引のため紹興からの派遣團が大擧して到來。〔直隸〕紹興人の寄籍が顯著。科擧を經て官員への途を歩んだり、バイ・パスとしては六部の胥吏や順天府屬各縣の下級役人をめざした。この邊り、資料は豐富、興味は津々、筆致は流暢、讀み手を飽かせない。

ただ一つ氣になることがある。それは、紹興人が鄉里を脱出する引金になったのが相對的過剩人口だとする傳統的見解である。元末明初の戰亂や太平天國の亂で浙西の人口が減少したのに、浙東の紹興は無傷であった。そこで浙東から浙西への移住が起こる。右のような中國史上の特殊な狀況下でなら首肯できる。しかし、それを普遍化し、無條件に移住の原因を人口の稠密に歸着させるのはいかがなものか。農民があくまでも營農を目的に稠密から過疎へと移住するのなら、まだ判る。―それでも相對的過剩人口論には與みしたく

ないが。それはともかく、著者が檢證したのは、紹興人が移住先で農業以外の各種の職業へ進出したケースである。官界は別として、實業界に限れば、清末民初に經濟社會の大きなウネリがあったわけで、それに呼應する形での移住と解するほうが積極的な評價につながるのではなかろうか。

屬官・胥吏・幕友　第五、六章は紹興人の官界への進出が論じられる。第五章は中國全土の屬官（州縣の典史・巡檢・縣丞・州吏目・各種徵稅大使・經歷等）を大清搢紳全書を典據として分析する。最初に、一八九二（光緒一八）年に照準を合わせて九種の表を作成し、統計的處理によって紹興府出身の屬官の實態を解明しようとした。結論的に、紹興府は全屬官の七％にあたる四四六名を占め、府屬各縣の中では山陰縣が五九％の二六一名と壓倒的であった。四四六名の從前の資格は監生が三七五名（八四％）と斷然トップをゆき、屬官ポストとしては典史の一六四名（三七％）と巡檢の一一四名（二六％）が群を抜いていた。約して、一八九二年の統計數値に基づけば、「清末に屬官として働いていた典型的紹興人は山陰出身で縣の典史となっていた監生ということになる（一〇二頁）。」と總括する。

つぎに一九〇四（光緒三〇）年版の大清搢紳全書を用いて表一〇を作成して屬官總數三、四二二名を分析し、屬官輩出の點で紹興府の競爭相手を探る。結果は以下の五項目に要約される。㈠上位二〇の屬官輩出縣の過半は長江下流域の中心部。㈡紹興府は上位二〇縣のうちの三縣（第二、三、二〇位）を占めた。㈢第一位大興縣と第五位宛平縣（いずれも順天府）の合計二六九名のうち、他鄉からの移住者の占めた割合は不明。㈣第二位の山陰縣の二〇一名は總數の六％にものぼる。㈤紹興府屬八縣全體の數は三五〇名で、全中國の一〇％を越える。

第六章は六部の胥吏と幕友である。この分野への紹興人の進出は著しい。その背景として、紹興の科擧受驗者にとっては、鄉里の過剩人口が不利に機能したと指摘する。明末以降、識字率が高かったため、割りふられた合格者數は熾烈な競爭を誘發した。「紹興府で生員試驗（府レベル）に合格することは、より文化程度の低い省で擧人試驗に合格するより難しかった（一〇七頁）」という。そこで、順天府の鄉試が域外者にも開放されていたことも手傳って、相當數が北京へ赴いた。この順天府の鄉試に合格できなかった者は六部の胥吏を目標とした。六部といっても、財政經濟を取り仕切った戶部が最も魅力的で、紹興人は優れた數學の專門知識を備えていたことに加え、寧波人とともに北京において男色の世界で名を馳せていたため、戶部の胥吏の中で優位を占めた。清初、戶部の胥吏は定額二四四名で六部中の首位であったが、實際には定員外の無給の助手（正規の胥吏の待闕者）が多數おり、全體で一、〇〇〇名を越えていた。ふつう地方衙門では、幕友は胥吏より一段上とみなされたが、六部の胥吏に限っては別格であった。地方官と違って、六部の官僚は幕友を雇うことを禁じられており、胥吏がその役割を代行した。また、新任の地方官が北京を出發するさい、戶部や刑部の熟練胥吏を幕友として雇うのが一般的であったという。紹興の胥吏は世襲性が強く、胥吏ポストが遺產視された。さらに、戶部が監生資格を販賣する衝に當ったため、販賣者と購入者が同鄉の誼ということになり、紹興閥が有效に作用した。

第六章の後半は幕友である。〝紹興師爺〟という呼稱により人口

に膾炙した幕友である。官界において、表向きは法律・税務知識に精通する専門家として尊重された彼等も、裏ではその知識を惡用する三百代言、ペテン師として蔑まれた。幕友にまつわる挿話を二三。「もし一人の紹興人もいなければ、それは衙門ではない（一一八頁）。」「貧窮から逃がれようとした多くの紹興の讀書人はこの職業（幕友）に從事した（一一九頁）。」さらに十九世紀末、魯迅の回想―「私の地方（會稽）では、ふつう落ちぶれた讀書人家族の子孫は、この二つの途（幕友か商人か）を選んだ（一一九頁）。」

さて、紹興の幕友には、胥吏あがりの幕友（專門知識のみ）と官僚志望の幕友（儒教的倫理觀をもつ）の兩種があり、相互間に一定の緊張があったとする。そうはいっても、黄宗羲（餘姚人）や章學誠（會稽人）のように、紹興の傳統である法律的專門知識の重要性を承認する立場もあって、兩者は必ずしも矛盾對立するとは限らないともいう。この微妙な兼ね合いを受けて、つぎのように總括する。「十八世紀末以前、紹興の鄕紳が〝幕友の持味〟と〝儒者の正體〟との間には必ず矛盾があると自覺していたかどうか？少くも乾隆の中頃まで、幕友は善良な儒者同然に振舞った。彼等は善良な專門家であった。その後、彼等は徐々に墮落し、もはや善良な專門家とはみなされないで、たんなる專門家となった（一一二頁）。」要するに、十八世紀末を境目として、以前は〔幕友＝儒者〕であったが、以後は〔幕友＝惡德にみちた專門家〕となるという圖式である。ただし、一方で十八世紀末から十九世紀初にかけて、大勢の惡德儒者が登場し、金錢で監生の資格や知縣ポストを購入した事實とつき合わせると、幕友だけに惡德の責めを課すのは酷だという。乾隆末期の腐敗墮落した政界を念頭に置くと、著者の總括は說得力にみちている。

言うまでもなく、紹興は屬官・六部胥吏・幕友を輩出しただけでなく、正規の官僚（進士合格者）も多數產出した。全國を府單位でみると、進士合格者數は明代で第二位（九七七名）、清代で第六位（五〇五名）であった。他地方と共通するのは、科擧への途を心掛けた點であり、相違するのは、不合格者の救濟策という點にあった。つまり、紹興閥を介して、不合格者を屬官・胥吏・幕友の世界へ送り込んだわけである。幕友に局限すると、それを輩出したのは紹興以外でも、たとえば江蘇省常州府武進・陽湖兩縣が擧げられるが、比肩できたのは時期的には同治・光緒期だけであった。清代を通じて、絕大な力を發揮したのが〝紹興師爺〟であることに疑問の餘地はない。しかも、「その成功の祕密は能力・適性・資質などではなく、組織（幫）のおかげ。紹興人は幕友の地位を世襲。全官僚が新米の紹興師爺でも雇ったのは、背後に紹興閥があったから（一二九頁、抄譯）。」と論ずる。概して紹興閥の隱然たる力を強調するのは正鵠を射る。

ただ、われわれの興味關心の焦點は幕友獨自の幫の存在と實態である。なにぶん、現在でも、やや距離を隔てた任意の二つの地方閥では、言語・風俗・習慣にかなりの差異がある。時代を溯れば尙更である。にもかかわらず、〝紹興師爺〟は全國に散らばって活躍したわけで、いったい、それを可能にした條件は何であったのか？この謎解きの鍵は、幕友の幫の實態に迫ることにあると豫想されるが、これは非常な難問である。從って、著者がそこまで足を踏み入れなかったとしても、非難を浴せられる謂れはない。將來、解明すべき課題であろう。

結論のことなど　すでに問題意識の項でふれたとおり、本書の序文は概して結論を先取りしていた。評言を換えれば、全體の構成の中で序文と結論とがシンメトリカルに對峙し、本論をバランスよく支えている。そうはいっても、當然のことながら結論には獨自の文章も提示されている。目に留った二箇所を紹介し、感想を添えてみたい。まず結論の冒頭で次のように述べる。「紹興にとっては、中國の王制から共和制への過渡期は、一連の重壓の鎖にもう一つの年代記の頁を加えたにすぎなかった。一九一一年革命は紹興の地域社會にとっては分岐點とはならなかった。階級關係は變化しなかった。農民は地代や稅金の負擔の重さで相變らずへばっていた。商人もまた釐金の重荷を負わされていた。どちらかといえば、共和制下の徵稅の方が、清朝よりもずっと情容赦がなかった（一五二頁）。」著者においては、一九四九年の〝解放〟へ向っての歷史的脈絡をさぐる視點が缺けていたことは既述した。その眼で辛亥革命を眺めれば、右の論斷は整合性に富むし、また事實認識の點でも的確さを感じさせる。もちろん、一九一一年にせよ一九四九年にせよ、革命を過大評價するのは、その後の中國社會の動きを一定のスパンでもって冷靜に觀察すれば、危險を伴う。二十世紀の中國革命が節目節目となって、中國社會が直線的に抑壓から解放へ向けて着實に發展を遂げてきたかどうか？この問いにどう答えるかは、われわれ中國研究者ひとりひとりに課せられた重い宿題なのかもしれない。著者は著者なりに、性急には中國革命に評價を下さないという姿勢でもって、一つの解答を示していると思われる。

もう一箇所は紹興の鄉紳の戰略を見透かした一文である。「第二部で考察したとおり、紹興の鄉紳はこの國の官僚主義の中で勢力範圍を擴大し、それを自分たち獨自の目的に役立てた。まず監生資格を、次には戶部の同僚胥吏から屬官ポストを購入するという戰略を追求することによって、紹興人は效果的に科學ルートを迂回して官吏となり、それによって中央政府が鄉紳支配をめざす重要な裝置を骨抜きにすることができた。たとえば、典史の地位を購入した者は誰れでも、劣紳のランクを擴大させた。それは儒學紳衿には通じないが、ひるがえって一般庶民に對しては威張りちらすことのできる資格であった。紹興はたんに個人の利益のために政府のレバーをどう操縱したらよいかを熟知する大勢の人閒を擁有しただけのことである（一五三頁）。」鄉紳の概念規定の項でも或程度はふれたつもりだが、清朝體制下での鄉紳なかんずく紹興の鄉紳の位置づけに關する著者の卓見は際立っている。右の一文を讀めば、半可通の評言は不要である。

愚評を閉じるにあたって、言い殘したことを若干。卷末の**注**は丁寧に檢査したわけではないが、充分かつ正確である。**參考文獻**も內外の研究書を細大洩らさず網羅している。一例をあげれば、陳橋驛『紹興史話』（上海人民出版社、一九八二年）といった近年の啓蒙書の類にまで目を光らせていたのには驚かされる。**用語解**のローマ字を拼音ではなくウエード式としたのは別に不便を感じないが、本文からの語彙拾集の度合がもう一歩というのが僞らざる實感。なにぶん用語解は本書を讀むには不可缺な部分なので……。**索引**も配慮が行屆いている。

Tueson : University of Arizona Press.
1986, 23.5cm, xv＋315 pp.